

願いから動きへ

52
2020 April

特集 小笠原 登

「平凡」ト云ウ語ニ尽キタリ

飯貝 宗淳

小笠原登さんは目の前の人を見失うことがあります。く、自他に誠実に向かい続けた人だと思います。

小笠原さんは国立大学の医学官としての自分を十分に理解しながらも、できることを精一杯されました。「癩予防法」を遵守し、その枠組みの中で一人の人としてハンセン病患者と向き合ったのです。それは患者の側からしてみれば、「あなたのこと�이大切だ」というメッセージを、言葉や態度やいろいろな形で伝え続けられたことに違います。

2019年12月に、真宗ブックレットNo.14『小笠原登ハンセン病強制隔離に抗した生涯』の増補版が発刊されました。その中で、小笠原さんに出会つた人たちが、小笠原さんのことを次のように言われます。

●「今でも最初の日に聞いた「普通の病気」という言葉が、私を支えてくれている」

●「先生は病気や病人を嫌わなかつたから、家の者にも嫌われんで普通に接してもらえた。この病気になつたけど、本当によかつたです。小笠原先生に会えて。」

●「先生は外で働いて生活している人には絶対療養所に入れとは言わないからね。「外に出でずっと働いたらいいよ、私が一生面倒見る」とはつきりと言われました。」

これらの言葉は、小笠原さんが患者さんたちと、
 「ハンセン病」という「病」ではなく、一人の「人」として出会つていかれた姿を教えてくれています。
 そして、小笠原さんは「救癩」について次のように言われます。
 ●「現在癩患者が苦痛としてゐるのは、癩そのものでは無くして、癩の誤解に基づく社会的迫害である。従つて救癩事業の急務は、社会の誤解を除いて患者を迫害より脱せしめるにある」（「癩患者の断種問題」『芝蘭』12号1938年）
 戦後のことですが、ある時、京大に入院したハンセン病患者の家族が目を泣きはらして相談してきたことがあつたそうです。父（患者）の住んでいた離れの小屋に役場や警察の人たちから火をつけられて、村の人たちに知れ渡り、職場からも解雇を言い渡されたと。小笠原さんは三日間休みを取つて、村中の人に説得して回り、そのおかげで息子さんは職場復帰ができたとのことです。
 このような姿勢は親鸞聖人の精神が息づく圓周寺によつて育まれました。圓周寺は小笠原さんが生まれたお寺です。そこでは、小笠原さんの祖父や母親がハンセン病の治療を行つっていました。
 小笠原さん自身はハンセン病に対する信念を、「平凡」ト云ウ語ニ尽キタリ」と表現していましたといいます。何となくではありますが、この「平凡」とは小笠原さんの生き方に通底している言葉のよう感じます。私自身の生きる姿勢を確かめながら、この「平凡」ということを考えたいと思います。

本号では、大谷派の僧侶でもある医師・小笠原登（1888～1970年）の生涯を様々な視点で特集します。小笠原さんは当時の社会の中で、ハンセン病問題は疾患そのものではなくて、その病気になった人に対する社会の迫害にあると指摘しています。現在、新型コロナウィルス（COVID-19）の蔓延により私たちの生活は多くの困難を抱えています。このような時こそ、私たちがハンセン病問題を通じて学んだ「同じような過ちを繰り返さないこと」とはどういうことか、しっかりと受け止め直していかなければと考えます。

小笠原登とは誰か

本間 義敦



2020年1月、人権週間ギャラリー展「ハンセン病と真宗 - 小笠原登の事績を訪ねて」公開シンポジウムが開催されました。当初、基調講演を藤野豊さん（敬和学園大学教授）にいただく予定でしたが、ご登壇がかないませんでした。そこで急遽、菱木政晴さん（「ハンセン懇」真相究明、ふるさと・家族部会委員）に「ハンセン病問題とは何か—小笠原登の事績とのかかわりから」をテーマにご講演いただきました。講演では、小笠原登の隔離政策との闘いや、家族訴訟にまで通底した願い、さらには念仏者としての小笠原登について語られました。本稿では、講演を聞いた「ハンセン懇」委員により、「小笠原登とは誰か」と、その姿の一端に迫ります。

小笠原登は1888年、愛知県甚目寺村（現あま市）圓周寺に生まれた。祖父の小笠原啓實は僧侶であり医師でもあった。登の晩年の著書によれば、祖父は「漢方医術を行い、癩病^(マコ)、淋病、梅毒、瘰癧^(ルイエキ)、黒内症の治療を得意としていた」と書かれている（『漢方医学の再認識』）。祖父・啓實がハンセン病の治療に従事し、ハンセン病が簡単に感染せず、また治療し得るという経験を持つていたことがうかがえる。そのような家庭の中で小笠原登は生活をしていた。このことが、後に自身が医師として、また僧侶として生きていくときの大変な経験になつていったのではないか。

基調講演で配られた資料には、「彼等の苦悩は疾患そのものにあらずして、社会の迫害にある」と書かれていた。これは小笠原登の書いた論文やエッセーなどから、その意味をとった言葉である。これと同じような言葉が、1996年に大谷派から出された謝罪声明の中で、「病そのものとは別の、もう一つの苦しみ」と表現

されている。真宗大谷派は、教団を挙げて「慰問布教」という関わり方をしてきた。声明は、なぜ謝罪しなければならないのかというと、慰問布教が、終生・絶対・強制隔離という国の政策を前提として、その政策を疑うことなく、むしろ円滑に進められるように、隔離があたかも保護であるかのように説き、それを療養所の入所者に受け入れさせるような形で機能させたからである。それが、「病そのものとは別のある病」をもたらした。

小笠原登は、真宗大谷派の僧侶でありながら、「彼等の苦悩は疾患そのものにあらずして、社会の迫害にある」ということをどのように考えていたのだろうか。そのことを考える上で、菱木さんは小笠原登を「不治の疾患、遺伝病、強烈な伝染病という三つの迷信に抵抗しつつ、迷信にとらわれない医療実践を貫いた孤高の医師だったと言える」と言われた。そのことは、1931年に小笠原登自身が書いた『らいに関する三つの迷信』（※註1）に詳しく述べられている。講演の中ではその三つの迷信について、次のように語られた。

①ハンセン病は治る病気であつたにも関わらず

問布教が、終生・絶対・強制隔離という国の政策を前提として、その政策を疑うことなく、むしろ円滑に進められるように、隔離があたかも保護であるかのように説き、それを療養所の入所者に受け入れさせるような形で機能させたからである。それが、「病そのものとは別のある病」をもたらした。

され、その慰問布教のあり方について謝罪している。

問布教が、終生・絶対・強制隔離という国の政策を前提として、その政策を疑うことなく、むしろ円滑に進められるように、隔離があたかも保護であるかのように説き、それを療養所の入所者に受け入れさせるような形で機能させたからである。それが、「病そのものとは別のある病」をもたらした。

ず、終生隔離を行うことで人々に治らない病気という迷信をうえつけたこと。

も屈さなかつた小笠原登を、一言で表現すれば、孤高を恐れぬ、医僧と言えよう。

(『孤高のハンセン病医師－小笠原登「日記」を読むー』 199頁)

②療養所内で行われた「断種・墮胎」や、いざれ病気になるだろうというニュアンスを含んだ「未感染児童」という言葉によつて、遺伝する病気であるという迷信をうえつけたこと。

③小笠原登の日記に「我ガ癩ニ対スル信念ヲ問フ。『平凡』ト云フ語ニ尽キタリ」とあるように、強烈な伝染病ではないにも関わらず、終生・絶対・強制隔離しかないと思わせる迷信をうえつけたこと。

では、その時代の他の医師はどうであつたのかといえば、「小笠原登だけでなく他の医師の多くも登と同じ意見のものも少なくなかつた」と講演では語られた。にもかかわらず、国として終生隔離政策は遂行され、結局、この病は治らないという迷信が社会全体に広まるきっかけとなつたのである。

基調講演の中で藤野豊さんの言葉も紹介された。

ハンセン病患者というだけで国家から政治的に差別された人々に、平等な人間として接した僧侶、宗教者としても高く評価されるべきである。学問的真理以外のいかなる権威に

実際、小笠原登は「らい予防法」という国の法律の中にありながら、患者に対してハンセン病の病名をカルテに書かずに抵抗した。法の下でありながら、患者自身の人権を守るという医療を行なつていたのが小笠原登という人であつたのであろう。

※註1『癩に関する三つの迷信』。「診療と治療」

第十八巻第十一号別冊



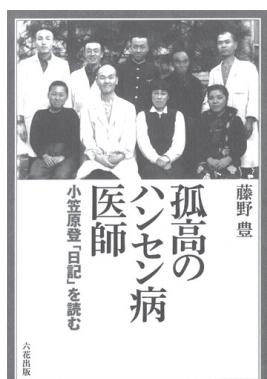
菱木政晴さん



『孤高のハンセン病医師－小笠原登「日記」を読むー』 藤野豊 著（六花出版）

「小笠原は孤高を恐れなかつたが、孤立してはいなかつた」（本文より）

本書は、小笠原登の生家である圓周寺に所蔵されている「小笠原登関係文書」の中の「日記」および関連する書簡や書類といった史料をもとに書かれている。その中では、「小笠原を絶対視することなく、史料に基づき叙述する」と言われ、国家・国策・社会の中で、医師としてまた真宗大谷派の僧侶として、小笠原登がどのように絶対隔離政策と闘い、どのように患者と接したのかが書かれている。藤野さんは、「日本の主な宗教は絶対隔離を支えたという単純な理解ではなく、絶対隔離に抗した宗教家の存在を認め、その信仰の検証を進めることが必要である。そのことを広範な宗教者、宗教学、宗教史研究者に期待したい」と述べられる。孤高の医師であった小笠原登から現代を生きる私たちが問われているのではないだろうか。



小笠原登氏と国賠訴訟、家族訴訟

稻葉亮道

立ち、さらには医師として医学の知見をもつて隔離政策に抗い、断種・墮胎手術に反対し続けた。しかし、小笠原氏の声にどれだけの人が耳を傾けたのだろうか。

現在癩患者が苦痛としてゐるものは、癩そのものでは無くして、癩の誤解に基づく社会的迫害である。従つて救癩事業の急務は、社会の誤解を除いて患者を迫害より脱せしめるにある。

（小笠原登「癩患者の断種問題」『芝蘭』一二号 一九三八年）

明治以降、「文明国」なるものを目指す国は、ハ

ンセン病患者を「國辱」とし、人を見失い続けた。

病気の治療ではなく、隔離に重きをおいた政策は、「皇恩」の強調により正当化された。「皇恩」とは皇室による慈しみや恵み、憐れみという意味だ。しかし、その隔離の実態は、終生・絶対・強制隔離であつた。隔離によつて患者の名前と家族、故郷を奪い、「療養所」とは名ばかりの強制労働を患者にさせた。療養所内の事件に関する裁判は、園内「特別法廷」で行われ、「重監房」まで作られた。さらには、断種・墮胎手術を強制し続けた。これ

は隔離政策が病気の根絶ではなく、国が作り上げた「らい」という存在の撲滅を目的としたためだ。

神山復生病院の院長であつた岩下壯一氏は、「祖国スター」（1932年）には「悲惨な患者を心から血を浄化せよ」（※註1）と述べている。この言葉は「社会的迫害」という国の姿勢を端的に表している。差別や偏見という言葉だけでは済まされない。人間の尊厳を根こそぎ奪つたのである。

小笠原氏はハンセン病問題の本質を見抜いていた。国の「救らい」が「皇恩」による隔離であつたのに対し、小笠原氏の「救らい」は病気の治療であり、患者が迫害から脱することを意味した。目の前の患者を見失わず、一人の人として大切にしたのだ。事実、「空白のカルテ」と呼ばれるように、カルテに「癩」という病名を書かなかつた。時に私は私費で薬を買い、自坊の圓周寺にて治療を行つた。患者がいるとなれば遠方まで足を運んだ。つまり、念佛者としていのちの温もりを願う本願に

宗門もまた小笠原氏の声に耳を傾けなかつた。

それどころか迫害に加担していつた。その中心であつた真宗大谷派光明会が作成した「癩絶滅小ポスター」（1932年）には「悲惨な患者を心から勞りませう」とある。ハンセン病患者をかわいそき一人の人だと見ていない。さらには「救護慰安」の目的を「文明国の体面」としている。これは親鸞聖人が歩んだ道とも、小笠原氏の姿勢とも全く異なるものだ。また、光明会の理事であつた武内了温氏は「一人癩に感染すれば九族地獄に墮するのである」（※註2）と書いている。しかし、患者とその家族を地獄に落としたのは病気ではない。それは国であり、「無らい県運動」を担つた人たち、市井に暮らす一人ひとりだ。

この「社会的迫害」を問うたのが「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」（ハンセン病国賠訴訟）と「ハンセン病家族訴訟」である。国だけが問われた

のではない。社会とは私たちであり、一人ひとりが厳しく問われたのだ。これは本来なら社会の内側から自発的に問われるべきであつた。すでに隔離政策は世界の医学界から批判を浴び、国内でも小笠原氏をはじめ数人の医師や政治家が誤りを指摘していたからだ。しかし、声をあげて立ち上がつたのは隔離された人たち自身だつた。その声は、悲痛な叫びであつたと言えよう。そして、何十年にもわたる筆舌に尽くしがたい闘いを開いた。

この闘いは、「らい予防法」の廃止（1996年）と国賠訴訟の勝訴（2001年）によって、ついに実を結ぶ。さらに、迫害されたのは隔離された人たちだけではなかつた。その家族も迫害されたのだ。そして、またしても被害にあつた家族自らが声をあげ、2019年によく勝訴になつた。

「私は社会復帰ではなく、犯罪者のように社会潜伏しているだけだ。」

これは療養所を退所した方の言葉だ。その方は「近所に知られるのが怖い」とも言つていた。「らい予防法」の廃止から24年が経とうとしている。

ハンセン病家族訴訟原告団長の林力氏の言葉だ。

しかし、今もなお変わらない現実がある。ハンセン病の元患者の人たちとその家族の多くが、社会潜伏を余儀なくされている。

現在、家族訴訟を機にハンセン病であつた家族の存在を周囲に打ち明けたところ、結婚の破談や離婚に至る事態が相次いでいる。打ち明けること自体をためらう人もいる。そもそも、家族訴訟の原告の多くは匿名であつた。社会の迫害は今も続いている。小笠原氏の言葉にある「誤解」が一人

ひとりの中に深く刻まれている。ハンセン病への正しい知識だけでは、「誤解」はなかなか消えない。どんなにハンセン病のことを説明しても、いまだに「恐ろしい病気」と言われることがある。人はハンセン病を正しく理解しても迫害するのだ。それほどまでに、国の隔離政策が残した爪痕は大きい。だからこそ、私たち一人ひとりが願われている。

それは、隔離された全ての人とその家族が大切にされる社会であろう。さらには、「救らい」の語にある救う者と救われる者という関係を超え、共に「御同朋」として生きられる温かな世だ。そのため、一刻も早く社会の迫害を終わらせねばならない。まさしく「急務」である。今こそ小笠原氏の声に耳を傾け、力を尽くす時だ。



家族訴訟判決報告集会の壇上にたつ林力さん

※註1

岩下壯一「祖国の血を浄化せよ」一九三七年
(『岩下壯一全集第八卷 救ライ五十年苦闘史』
中央出版社)

で語ることのできる社会にしていかなければならぬ。」

※註2 「癪絶滅と大谷派光明会」一九三一～一九三二年
(『真宗』第三六二～三六四号
一九三一年一二月～一九三二年二月号 真宗大谷派)

1888年、小笠原登氏は愛知県甚目寺村（現あま市）にある真宗大谷派圓周寺の二男として生まれました。

近年、小笠原登氏の遺文や遺品を通して、小笠原氏が深く浄土真宗の教えを聴聞していたことがわかつてきました。小笠原氏がどこで浄土真宗の教えを学んだのか。誰を師事したのか。どのように仏教観をもつっていたのか。今後研究がなされることで、具体的なことが解明されていくと思います。本稿では、1941年2月から7月にかけて宗教の専門新聞である『中外日報』紙上で行われた小笠原登氏と早田皓氏の論争をきっかけに、早田氏から小笠原氏に宛てた手紙から、小笠原登氏の仏教観の一端を訪ねたいと思います。

小笠原登の仏教観

谷 大輔



写真：圓周寺本堂

早田氏と小笠原氏の『中外日報』紙上で展開された論争は、医学的な観点からのものでした。しかし、論争の後、早田氏が小笠原氏に宛てた書簡があります。その書簡から早田氏の仏教観を考えることができます。

迷へる者と共に迷つて共に苦んでやることも仏教的の行き方かと存じ候へ共之は小乗的の考へ方にて結局は迷へる者を彼岸の悟に導くのが理想と存じ候。共に迷に迷ひつゝ彼岸に導くか、短刀直入迷夢を開かしめて彼岸の悟を得せしむる道は二途と存じ候。然し仏教の修行にしても必ず時代を加味すべきことは必定に有之、現代に於ての悟入の方法を申せば結局後者が良くなきやと愚考致し候。即ち癪者を真に救ふ道は短刀直入入院隔離により其の家族及び周囲より伝染の危険を失はしめ又入院者の良き心の友とする綱脇龍妙氏と縁戚にあたり、自身も日蓮宗の僧籍をもつていました。綱脇氏は私立ハンセン病施設身延深敬園を作つた方です。早田氏は綱脇氏の勧めでハンセン病の治療を志したと言われています。

（藤野豊『孤高のハンセン病医師小笠原登「日記」を読む』より）

ここで早田氏が小笠原氏のあり方を“小乗的”と表現します。

それは、個々のハンセン病患者に寄り添い救済を模索しているけれど、それは患者の周りにいる人間ばかりか大多数の国民の不利益になる、と読みます。そして“大乗的”と表現した早田氏をはじめとする隔離を推進するの方は、隔離によって「其の家族及び周囲より伝染の危険を失はしめる」。そして、「入院者の良き心の友として其の終生を最大の満足を与えて終らしむる」と言い、隔離されたハンセン病患者は辛いかもしれないが、自分たちの愛情によつて入所者に心の安らぎを与えて救済するのだと述べています。つまり、多数を救うために個を犠牲にするのだと読みます。

個を犠牲にして多を救うという考えは、まさに明治から敗戦まで大谷派教団をはじめとする日本の仏教教団が教義として説いた「一殺多生」という、敵国の兵士を殺すことは自国民の多くを生かすことだという思想と重なります。そして、隔離された入所者の自由と人生を奪いながら、その事実に向き合わず入所者に療養所に入ることを善行だと受け入れさせ、心の持ちようで救済しようという

考えは慰安教化そのものです。

早田氏に“小乗的”と批判された小笠原氏の生き様は、多数のために個を犠牲にし、個を見失うものではありません。それどころか、どこまでも苦悩する人と共にあろうとするものでした。天親菩薩の「願生偈」には、淨土を願う者の歩みは個人の救済にとどまらず、「普く諸の衆生と共に、安樂国に往生せん」と、全ての苦悩する人間と共にある歩みであると言われます。小笠原氏の人として

この生き様は「普く諸の衆生と共に」という具体的な実践であり、その一人を見失わない生き方こそ、まさに“大乗”的”の仏道の実践です。

小笠原登氏は、ハンセン病患者と共に生活した子どもの頃からの体験を通して、ハンセン病は感染しにくい病気であることを知つておられたのでしょうか。そして、念佛を称え、生活の中で願生淨土の道を歩んでいた祖父やご門徒に、社会から排除されたハンセン病患者を決して見捨てるところなく、共に生きようとする姿を見ておられたのでしょうか。「普く諸の衆生と共に、安樂国に往生せん」という仏道を具体的な生活の中で歩んでいた圓周寺の人々の姿が、多くを救うために個を見失うことなく、一人の本当の解放を模索した小笠原登氏の原点にあるのではないでしょうか。

このようないくつかの歩みの背景は、小笠原氏が生まれ育った圓周寺にあると思われます。甚目寺村には甚目寺觀音があります。甚目寺觀音では積極的に施食が行われていたため、古くから食に困った人々が集う場所でした。その中には放浪していたハンセン病患者もいました。そのハンセン病患者の駆け込み寺が圓周寺だったのです。

小笠原登氏の祖父である小笠原啓實氏は幕末に圓周寺に入寺しました。尾張藩の下級武士であり、漢方医学と蘭学も学ぶ医者でもありました。小笠

小笠原登の『真宗聖典』

小笠原登さんが生まれ育った愛知県あま市にある圓周寺から、小笠原さんの『真宗聖典』が見つかりました。『真宗聖典』とは、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人の著作や、聖人が大切にされた経典や先輩方の言葉等を集めたものです。見つかった『真宗聖典』には、所々に小笠原さんの学びが見られ、僧侶である小笠原さんは垣間見える貴重な資料です。

特に注視したいのが『一枚起請文』という、親鸞聖人の師である法然上人の「遺言」とも言われる文章です。小笠原さんは、これをわざわざ色紙に書きとめるほど、大切にされています。

『真宗聖典』を開くと、次の言葉が小笠原さんによつて書き加えられています。

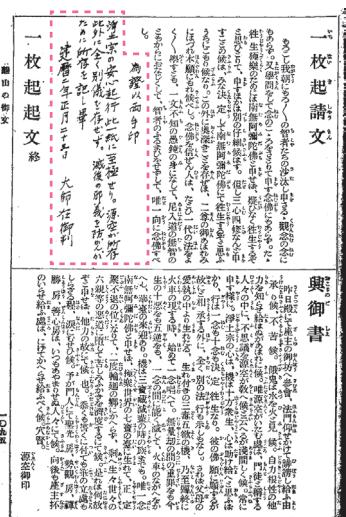
しょうのためによつてをもつていんす
為證以両手印

じょうどしゅうあんじんきぎようこのいっし
淨土宗の安心起行此一紙に至極せり。源空が
しょぞんこのほかまたたべつぎ
所存此外に全く別儀を存ぜず。滅後の邪義を防
がんがために所存を記し畢
けんりやく

建暦二年正月二十三日

たいしげいおんばん
大師在御判

(淨土宗の信心と実践はこの一枚のことには極まつた。私法然が知るところでは、このほかには全く知りません。私が亡くなつた後、これに違背するような邪な教えを防ぐために、知るところを書きました。)



小笠原さんが書き加えた言葉は、『一枚起請文』では本文に添えられた言葉になります。そのため、『真宗聖典』では省略されていたのです。なぜ、小笠原さんはわざわざこの一文を書き加えられたのでしょうか。

少し穿った見方かもしれませんのが、この「滅後の邪義を防がんがために」という言葉に、生涯をかけてハンセン病隔離政策と闘つてきた小笠原さんの願いを感じます。小笠原さんを取り巻く状況は、世間全体が隔離政策に隸従し、知識や経験によって間違いを指摘することができない中で、どこで踏みとどまることができるのか、どこに立ち帰つていくのか、という瀬戸際でありました。人を人として見えなくする隔離政策という「邪義」を防ぎ、人間の尊厳回復の願いに立脚した法然・親鸞の教えが、小笠原さんの願いの根拠だつたのではないかでしょうか。

また、その願いは「滅後の邪義を防がん」です。小笠原さんが亡くなられた後の世の、大谷藤郎さんや和泉真藏さんをはじめ、私たち一人ひとりにかけられた願いでもあるように思います。

(解放運動推進本部 中山量純)

願いから動きへ
Network News

真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会
ネットワークニュース『願いから動きへ』52号

発行日 2020年4月24日

発行人 望月慶子

発行 真宗大谷派解放運動推進本部

〒600-8164京都市下京区上柳町199
TEL 075-371-9247
FAX 075-371-6171
kaiho@higashihonganji.or.jp
しんらん交流館ホームページ
<https://jodo-shinshu.info/>

▼2019年はハンセン病医師であり大谷派僧侶の小笠原登師の没後50年の年でした。同年6月にハンセン病家族訴訟の原告勝訴判決が確定。患者だけでなく家族の被害も認めた判決に、「思いよ届け」の声がやつとここまでと、うれしい一步となりました。▼没後50年を機に、その事績を訪ねる行事が企画されました。12月13日に名古屋別院において、「叶鳳忌—小笠原登50回忌法要」が勤まり、登医師から診察を受けられた方からお話をありました。解放運動推進本部でも人権週間ギャラリー展にちなみ、「ハンセン病と真宗—小笠原登の事績を訪ねて」を開催、本誌にシンポジウムの報告を収録。『真宗ブックレット増補版』も出版されました。是非ともご一読ください。▼「彼らの苦悩は病そのものにあらずして、社会の迫害にある」という小笠原登さんの言葉は、新型コロナウィルスの拡大に伴う不寛容な社会の中で右往左往する今の私たちに、どこに軸足をおいて生きているかと問いかれます。▼そこには病原菌ではなく人間。一人の人を見失いそうな時代に、あらためてハンセン病問題に出会っていきたいと思います。▼行事の延期が続き園を訪問する機会が持てません。またお会いして話し合える時を楽しみにしています。

(解放運動推進本部 山内小夜子)

あ

と

が

き